いつかの足跡（仮）

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつかの足跡（仮）

【Ｎコード】
Ｎ０３６６Ｒ

【作者名】
蒲公英

【あらすじ】
僕の少年時代は、こんなだった。自分を醒めた大人だと思い込んでいた、あの頃。思い返すと滑稽で、あからさまにみっともない日々、僕は自分が子供であることすら知らなかったんだ。思春期の日常スケッチです。

タイトル、後で変えると思います。途中で改稿もあるかと思います。ゴメンナサイ、先に謝っときます。

つまんない

中学校三年生の僕はもう既に女の子と寝ることを日常にしており、教室の中の誰それが可愛いだのアイドルの誰だかがタイプだのと騒ぐクラスメイトたちを、ちょっと小馬鹿にして斜め上から見るような、早熟なガキだった。部活動は夏休み前に引退し、ぽっかり空いた夏休みに夏期講習に行くこともせず、朝から晩までゲームとコミック誌で過ごして、誘われれば家の人が留守の女の子の部屋に上がり込んだり、近くの小学校の校庭でサッカーに興じたりした。

将来の展望などどこにもなく、従って行きたい高校なども見当たらず、行動の基準は「面倒か面倒でないか」「愉快か不愉快か」の選択しかなかった。

「今は何も浮かばなくても、何かしたいと思ったときに、学力がなくてはできないものもあるのよ」

母に散々言われた言葉だ。父とは数ヶ月に一度しか口を利かなかった。絵に描いたような平凡なサラリーマンの父は、世界一ダサイ男に見えた。休みの日は緩んだ身体をテレビの前に横たえ、趣味もなく、友達もいないようだった。時々僕に向かって開く口から出る小言は前世紀の遺物のような精神論で、それが自分に活かせていれば、あんたの人生はここになかっただろうと、僕は心の中で悪態を吐くのに忙しかった。

将来を問われても父と母の地味で繰り返しの毎日しか浮かばず、あんな生活ならば今現在持っているものの継続だけで充分だと思う。名の通らない大学を卒業して名の通らない企業に勤める父と、家計を支えるためにパート勤めの母が、精一杯の努力をして築いた生活がこの程度なのだとしたら、そこには夢も希望も見出せないではないか。

時々ミュージシャンやらスポーツ選手やらと言う友人もいた。そんな人たちは全体の中が一握りにも満たないことはもう知っていて、それには特別な才能や桁はずれた努力が必要なことを知らないほど、幼くはない。努力して何も得られないのなら、努力することを放棄するのが悧巧な人間だと思う。

なるべく不愉快になることをせず、苦痛を伴う努力を放棄し、死ぬこともせずに生きていく。

これが中学校三年生の僕の信条であり、生き方だった。

教室には色の浅黒い小柄なクラスメイトがいた。通称「Ｐちゃん」は本名浦上誠という。何故Ｐちゃんか、実はＰｈｉｌｉｐｐｉｎｅｓのＰだ。母親がフィリピン出身で、彼女自体は大学を卒業して商社で父親と知り合ったらしいが、中学生にそんなことは関係ない。ある固有のイメージで胡散臭いものとして扱われ、Ｐちゃんは成績優秀な努力家であったにもかかわらず、常に一段下に見られる厄介な立場だ。

Ｐちゃんの父親が勤める商社が大々的なリストラをして、Ｐちゃんの家庭事情が大きく変わったのは、夏休みの少し前だ。むろん僕たちにそんな話はリアルじゃないし、まして「高校に行けないかも知れない」なんて事情は想像外だ。Ｐちゃんはもう地域では学力の高い私立高校の内定が出ており、それを蹴っても公立の高校に行くのだろうと友人全員が考えていた。

夏休みに会うたびにＰちゃんの顔は翳りを帯びていたが、「深刻になりやがって」と揶揄する者がいるほど、僕たちには遠い話だったのだ。

ウザい

「おや、充君はお早いお帰りでございますこと」
食卓でノートパソコンを開いた母に声を掛けられたのは、夜の九時を過ぎていた。公園で女の子と何やらして遅くなった後ろめたさは、そのまま仏頂面の返事だ。父はまだ帰宅しておらず、僕は黙って炊飯器の蓋を開けた。
「覚えちゃったものは仕方ないけど、避妊だけはちゃんとするのよ」
衝撃的な言葉と普段どおりの母の表情に、僕はうろたえた。
「そんなことしてねえよっ！キモいこと言ってんじゃねえっ！」
大きな声を出すことは事態を認めている証拠だと思うには、僕はあまりにも幼かった。母はノートパソコンの画面を指差した。
「中学生って、本当にバカ。全世界に自分が誰とエッチしたか叫ぶ必要はないって、あんたの彼女に言っとけ」
口調も変わらず別に怒っている様子はなかったが、見せられた画面には、その時間まで僕が一緒だった女の子の名前があった。

それはその当時流行し始めた「プロフ」と呼ばれるサイトで、流行モノの好きな女の子たちがこぞって登録し、日記や写真をせっせと携帯電話からアップしていた。僕の相手の女の子も、そのサイトを得意気に見せてくれたことがある。
「ラブラブだのエッチ何回目だのって、実名で世界中に見せたがる人の気持ちはわかんないけどね。頭悪いったら」
そう言いながら母はパソコンをシャットダウンした。自慰を覗き見られたような羞恥と逆上を、汲んでもらえるだろうか。
「わざわざ検索したのかよっ！ウザい、キモい、死ねっ！」
「わざわざじゃないよ。中学校の予定をダウンロードしようとしたら、検索で引っ掛かったの。同じクラスの名前があるなーと思って見たら、あんたのフルネームがあったわけ」

逆上しすぎて食欲は失い、残りの夕食をかきこむようにしたためると、僕は食卓を蹴立てた。
「死ねよ、おまえ」
「母ちゃんが死ぬと、困るのはあんたでしょ？」
「別に困んねえよ。キモい」
母は気を悪くした風もなく、洗い物を始めた。
「箸箱、出すの忘れないで頂戴ね」

「女の子と遊ぶのも結構だけどね、受験だってちゃんとわかってる？」
「おまえに関係ないだろ」
「お金出すのはこっちだからね、高校に行かないんなら話は別だけど」
売り言葉に買い言葉で、高校には行かないと答えようとしたところで、玄関の開く音がした。父の顔も見たくない俺は、自室に引き上げて寝転んだ。
受験だと言われてもまったく現実味はなく、普段遊んでいる友達も特に気にしてはいない風で、夏休みの宿題は図書館でテキストを回しながら写しあい、終わらせていた。
親も学校も一生の選択だと言うけれども、ありきたりに生活するしかないのならば、努力をするのは億劫だ。

さて、Pちゃんの話に戻る。
Pちゃんの母親が妹を連れて生まれた国に帰ってしまったと知ったのは、夏休みの終わり頃だ。毎年夏休みには戻っていたのだが、一月たっても戻ってこない。慌てて電話した父親に、そこで子供を育てたいからPちゃんも寄越せといったそうである。
「やだよ、俺、言葉もわかんないところに行くのは」
Pちゃんの母の実家は比較的裕福で、それでも妹を育てるためには毎月金を送らなくてはならず、失業したPちゃんの父親は、ハロ

ーワークに通いつめている。退職金というものがどれくらいの額であったのか、僕たちは未だに知らないが、そんなに大金ではなかったのだろうと予測がつく。少なくともPちゃんが私立高校を諦めたのは、夏休み中だった。

受験について甘く考えていた僕が少数派だと知ったのは、夏休み直後の試験だ。僕の偏差値は一気に15近く下がり、その前まで提出していた志望校の合格率は20%に落ちた。その時は調子が悪かったのだと思ったのだが、その後の学力試験でも普段通りの勉強で普段通りの点数だった僕は、クラスの中で下層部になっていた。

根拠のないプライドはあっさりと砕け、僕の志望校は選択の幅がひどく狭くなっていった。

担任は「やる気を出せば挽回できる」と何度も言ったが、やる気はどこかに落としたらしく、僕の生活はまったく変わっていかなかった。

横断歩道

ヤブがPちゃんに殴られたのは、九月の終わり頃だった。
「いいよな、勉強しろとか言われなくて、好きなことできるじゃん」
ゲーム命・学力下層部のヤブは、毎日母親からの攻撃に死ぬほどうんざりしていて、いかにしてそれをやり過ごすかを至上命題としていた。
「学校サボってゲームしてても、誰も何にも言わないなんて、天国だよなあ」
「親バレした時が煩いんだよな」
ヘラヘラ同意した僕たちを、Pちゃんは冷たい顔で見ていた。
「メシも自分で用意、石鹸がなければ自分で買いに行くんだぞ」
ヤブはそんなこと大したことないと言わんばかりに続けた。
「コンビニで買えるじゃん。何にも言われなくて、好き放題って羨ましいよなあ」

Pちゃんの家の実情は、子供も把握していなくては生活が立ち行かなくなる種類のものだ。Pちゃんの父親は知り合いの伝手で仕事を始めてはいたようだけれど、アルバイト程度の扱いだったらしい。マンションのローンと仕送りでがんじがらめになり、賢いPちゃんは自分の先の生活について、僕たちよりも遥かに真剣だった。
「おまえらに、わかるか。家に帰ったらメシがあって、掃除しなけりゃ風呂はカビだらけになるなんて知らないんだろ。ゴミだってゴミ箱に入れればおしまいじゃないんだ」
抑えた声は震えていた。
「えー？そんな事くらい、大丈夫だって。親、いなくなんねえかな」
その直後に聞こえたのは、肉を打つ音だった。

気がつくとよろけたヤブと、拳を固めたままのPちゃんが向かい

合って立っていた。
「何にも知らないくせに！俺はやりたいことがあるんだよ！だから大学に――――」
そこまで言って、Pちゃんはくるりと後ろを向いて走り出した。
誰も追わなかった。
「なんだ、あれ。悲劇のヒロインか？」
「バカ、ヒロインってのは女だぞ」
ヤブはニックネームの由来である斜視気味の目でPちゃんの後姿を睨んでいた。僕たちはなんとなく気まずく歩き出し、コンビニに寄ることもなく帰宅した。

少しだけ生活の重さを持ち始めたPちゃんは、もう横断歩道を渡って道路を挟んで歩いているようで、僕たちのように親の干渉や意識の拘束よりも、もっと見なくてはならない何かを見ているようだ。
「俺、高校行ったらバイトして金溜めて、アパート借りるんだ」
「あ、じゃあ、全員で借りて、たまり部屋にしねえ？」
そんな会話を交わして実現可能なことのように思い、現実は甘いのだと考える僕たちとPちゃんは、ずいぶん離れてしまっていることに気がつく。

Pちゃんは翌日、学校をやすんだ。その翌日も休み、その後何事もなかったかのように登校すると、努力家で陽気でノリの良いPちゃんに戻っていた。ちょっと調子に乗りすぎたかなと反省した僕たちは、戻ったPちゃんの顔色を見て、すぐにもとのだらけた生活に埋没して行った。

僕だけ

十月に入ると、「つきあっている」筈の女の子は、急に冷たくなった。今にして考えれば、まわりの受験準備に感化されて、本人も勉強や生活態度を改めようと思った時期だったのだろう。僕はまだ、志望校の研究もしていなかった。

「みーくん（彼女は僕をこう呼んだ）、しばらくエッチできないけど、浮気しないでね」

彼女はその後しばらくメールや電話をしてきたし、授業中に書いたノートの切れっ端の手紙も寄こしていたど、部屋には呼んでくれなくなった。最初ふられたのだと落ち込んでいた僕は、部屋に呼ばれなくなることに慣れると、彼女自体がどうでもよくなった。そしてメールの返信がおろそかになって、本当にあっさりと「もう、別れよう」とメールした。毎日学校で顔を合わせているくせに、それで終わりになってしまうのだ。

Pちゃんが猛烈に勉強しだしたのも、それと時を同じくする。

「俺、自衛隊に入る。オヤジだって好きであんな仕事してるんじゃない、俺だけがやりたいこと主張したってダメだ。俺は自力で大学に行く」

陸上自衛隊少年工科学校（現在は、高等工科学校）というのが正式名称らしい。

「Pちゃんの所のマンション、売っちゃわないの？」

訳知り顔の友達が言った。

「売ったら、帰って来るところがなくなるじゃないか。妹も母ちゃんも」

口にこそ出さなかったが、僕はPちゃんはもう諦めているのだと思っていた。家族がバラバラになったことも、何の目標だか教えてくれない目標をクリアすることも。

Ｐちゃんは何も諦めないで、じっと自分のできることについて考えていたんだ。

ああ、Ｐちゃんはすっかり、僕たちと違うところに行ってしまったんだな。それが実感として湧いて来た時に、僕だけが子供の場所に取り残された気になった。女の子と遊ぶこともできず、子供っぽいと思っていた同級生たちは進路を見据えて準備を始めており、考えることさえ面倒がっていた僕を置いて行った。

たとえば明日交通事故にでも遭って死んでしまえば、頭に叩き込んだ英単語はすべてパアで、その英単語を叩き込む時間は女の子と寝る時間だったかも知れない。そんな風に思う僕は、どこか間違っているだろうか？

僕の成績は落ちるだけ落ち、母の小言が諦めの言葉に変わった頃、学校で三者面談が行われた。

「迫田君の一学期の成績を考えると、志望グループはこの辺なんですが」

担任の教師はいくつかの高校の資料を指し示した。

「偏差値はどう？」

模擬試験の結果は学校には知らされず、偏差値は家に直接送られる。

「そのあたりだと、合格率は２０％程度です」

母はため息混じりに答え、教師に驚いた顔を返された。

「迫田君、大学には行かないの？」

女性教師は僕の顔をまっすぐに見た。

「そんな先のこと、考えてないし、タルい」

僕は正直に不貞腐れた答え方をした。

「大学なんて、大学に行くときに考えりゃいいじゃん。今そこまで考えんの、面倒臭い」

「本当は、やりたいことが見つかったときにはじめるのがベストだわね。迫田君は多分、スタートの遅い人なんだとは思うわ。だけど大学に行こうって意思があるなら、高校の選び方は大切だってわかる？」

母とまったく同じ言葉で、それは母の考え方だと思って聞き流していた僕は、その時はじめてそれが一般的な認識だと知った。

「まだ取り返しはつくのよ。そのままの偏差値で行くと、迫田君の進学するレベルの高校からは大学進学者なんていない。その中で流されない自信はある？」

流されない自信なんて、あるわけがない。自分が何でも億劫がっているのを知っているのは、他ならぬ僕自身だ。

「勉強の結果は二ヵ月後に発揮される。今からスパートをかけてみなさい」

反論するのも面倒なので、とりあえず頷いた。

「充、何言われた？」

「んー、やる気出せって。あとはなんだか、うぜーこと言われたけど」

「おまえ、ぜんっぜん勉強してないもんなー」

一緒に遊んでいる筈の友達にすら全然勉強してないと言われたのは、ちょっと驚いた。僕は友達も僕と同じように、何もしていないのだと思っていたから。

「そりゃ塾でもみんな真剣だしさ、将来好きなことしたいし」

「好きなことって？」

「まだ決めてないけど。決めようと思ったときに、残り物しかないのなんて、いやじゃん」

スタートが遅いと担任は言った。少なくとも、明日死んだらすべてパア、なんて考えていたのは僕一人だったらしい。勉強をする気は相変わらず持てなかったけれど、それは僕に重く圧し掛かってきた。

スタート地点

ちょっと机に向かってみようと思ったのは、いくつか遊び半分の学校説明会に出た後だ。学校なんてどこも同じようなものだと思っていたのに、良く言えば生徒の個性豊かな中学校と、学力や内申書のフィルタを通している高校では全然違うのだ。成績の落ちた僕が無理せず行ける学校っていうのは、僕のように流されやすい人間が行くと、とんでもないことになりそうな学校だった。そこで理性を保ったまま卒業するのなんて、意志の弱い僕には無理だと自分で理解できる程度には、僕は自分を知っていた。

やっと警報が鳴り始め、初めて母に問題集を買ってくれと言った。

「自分で使いやすいものを選べばいいのに」

「うるせえな、何でもいいから買ってきてよ」

実は、参考書と問題集の違いすら知らなかったのだ。友達に訊ねるには妙なプライドが邪魔をするし、母と一緒に書店に行ってアドバイスを聞くなんて、考えただけでぞっとする。本当はPちゃんに相談したかったのだが、Pちゃんは僕よりも相当先に進んでしまっていて、本当に今更相談できることでもない。何かを考えようとせずに後回しにしていた僕は、自力で始めるしかないのだ。

家で勉強はしたくなかった。勉強していると両親に思われるのも嫌だったし、自室の机の上には遊び道具が積みあがっていたからだ。あくまでも「勉強せずに成績が上がった」というスタンスを取りたかったのは、妙なプライド以外の何物でもない。ファーストフード店やファミリーレストランに居座り、小遣いはあっという間に失くなった。図書館という手があると気が付いて行ってみると、座っていた友達が早朝から席取に並ぶのだと教えてくれた。

「そんな面倒臭えことしてんの？じゃ、いいや」

僕と別れた女の子は、僕よりもずいぶんレベルの高い高校の受験を決めていたし、「どうでもいい」のスタンスを貫いていた僕に相談相手はいない。そのために僕は一人で考えねばならなかった。とりあえず母から差し出された問題集を解き、終わってから答え合わせをしては放った。

「間違えた部分を解きなおすのが勉強なのに」

「うるせえ。口出すなよ、キモいから」

口答えした夜に両親が眠ってからこっそりと、放った問題集を拾って問題を確認する。その時のプライドを正しい方向に使えば、また違う道を歩いたかも知れない。付け焼刃の勉強で十二月に入り、志望校決定の時期は迫っていた。

早々に推薦で私立高校に入学を決めたものも居たし、難関校に向けてのラストスパートをかける者もいる。

「充、まだ決めてないの？」

すでに願書を出し終えたPちゃんが、歩きながら単語カードをめくる。

「何やっていいのか、わかんねえし」

Pちゃんの浅黒くて小さい顔は、精悍だ。

「楽ばっかりしようとしてるからじゃない？充って成績は悪くなかったけど、バカだよな」

「Pちゃんみたいに頭良きゃいいけどさ」

「別に頭は良くない。考えてることがあるだけだ」

Pちゃんは小柄で、体格の基準はギリギリだったと聞いた。印象的な細い手足には似合わぬ俊足で、サッカー部のレギュラーだったことを思い出した。

「Pちゃんって走るのも早いじゃん。俺とは出来が違いすぎる。絶対受かるよな」

「絶対なんて、ないんだ。合格する確立を上げないと」

ここまでやったから大丈夫と気を抜いて、受験に失敗した話はい

くつも耳に入っていた。何でも出来て、どこの高校にだって入れそうなPちゃんが気を抜いたりしていないのに、僕はすべてを面倒がって逃げていた。
成績最下層のヤブですら、今更英語のＢｅ動詞の暗記を始めているのだ。
「どこでもいいけど、高校には行っとこうと思って」

「工科学校に行ったら、もう誰も俺をPちゃんなんて呼ばない」
単語カードに目を落としたまま、Pちゃんは言った。
「もしかして、Pちゃんて呼ばれるの、イヤだった？」
「そう言ったとき、おまえらは笑ったよな。冗談なのにムキになるなとか言って。そのまま定着させたくせに」
忘れてた。中学校に入学した頃は、Pちゃんを浦ちゃんと呼んでいたのだ。
「俺は、おまえらみたいなバカには、何が何でも負けない」
強い口調でそう言った後、僕の顔を見てにやりと笑った。
「試験が終わってから言おうと思ってたんだけどな。受験でイライラしてるんだ、怒るなよ」
怒れる筈はない、ずっと静かに怒っていたのはPちゃんなのに、僕も含めて誰もそれに気がつかなかった。
Pちゃんは最近大人になったのではなくて、ずいぶん前から大人だったのかも知れない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0366r/

いつかの足跡（仮）

2011年6月26日22時40分発行